

二〇一九年度 第71回夏休み良書推薦運動

読書感想文コンクール表彰式

令和元年 10月12日(土)
サンセール盛岡

主催	岩手県良書推進協議会
協賛	岩手県学校生活協同組合
後援	岩手県小学校長会
	岩手県学校図書館協議会
	岩手県PTA連合会

式次第

- 一 開式のことば
- 二 主催者あいさつ
- 三 賞状並びに記念品授与
- 四 審査報告
- 五 来賓祝辞
- 六 作品朗読
奥州市立水沢小学校 一年 千田 瑚花
- 七 感想発表
宮古市立田老第一小学校 五年 飛澤 咲良
- 八 閉式のことば

審査員

大石善弘先生	近藤澄江先生	齋藤英明先生	畠山明美先生	藤村由美先生	田代五月先生	大淵奈実先生	永井臣之介先生	杉浦美香子先生
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	---------

二〇一九年度 第71回

夏休み良書推薦運動読書感想文コンクール

入賞者名簿

『は図書名』

〈最優秀賞〉

おねえちゃんのきもち、よくわかる！ 『おねえちゃんって、まいにちはらはら！』

奥州市立水沢小学校 一年 千田 瑚花

ぼくのお父さんもサラリーマン！ 『オニのサラリーマン』

盛岡市立杜陵小学校 二年 久慈 廣多

仲間とつくる「ひみつきち」 『秘密基地のつくりかた教えます』

北上市立黒沢尻北小学校 三年 小林 蒼生

宿題忘れるのも楽じゃない 『先生、しゅくだいわすれました！』

北上市立黒沢尻西小学校 四年 豊巻 慶

残菜とゆうなと給食と 『がんばれ給食委員長』

宮古市立田老第一小学校 五年 飛澤 咲良

自分と向き合う 『スケッチブック』

滝沢市立滝沢第二小学校 六年 新沼 奎華

〈岩手県小学校長会長賞〉

おねえちゃんになってよかった 『おねえちゃんって、まいにちはらはら！』

盛岡市立厨川小学校 二年 小辻 佳歩

先生の本当の目的は 『先生、しゅくだいわすれました！』

宮古市立山口小学校 四年 箱石 香乃

それぞれの一步 『ぼくらの一步』

宮古市立宮古小学校 五年 大村 光介

〈岩手県学校図書館協議会長賞〉

なぞなぞはむずかしい 『なぞなぞのみせ』

盛岡市立中野小学校 二年 押川 笑

上手なウソって大へん 『先生、しゅくだいわすれました！』

花巻市立宮野目小学校 三年 吉田 景都

協力することの大切さ 『ぼくらの一步』

宮古市立山口小学校 六年 川戸 綾乃

〈岩手県PTA連合会長賞〉

オニもにんげんもおんなじだね 『オニのサラリーマン』

盛岡市立城南小学校 一年 桐田景護

命と向き合うということ 『ハニーのためにできること』

軽米町立晴山小学校 四年 古館和華

スケッチブックがつないだもの 『スケッチブック』

宮古市立田老第一小学校 五年 佐々木凛太

〈優秀賞〉

かわいいまえばちゃん 『まえばちゃん』

盛岡市立上田小学校 一年 高橋理紗

「おかあさんにあいたい」 『ともだちはなきむしなこいぬ』

宮古市立山口小学校 二年 花坂明香

わくわくが止まらない 『秘密基地のつくりかた教えます』

宮古市立鍛ヶ崎小学校 三年 佐藤奏介

堂々と話せること 『先生、しゅくだいわすれました』

北上市立鬼柳小学校 四年 武田拓馬

軽い体と重い命 『100グラムのいのち』

北上市立いわさき小学校 五年 小原花

がんばる給食委員長 『がんばれ給食委員長』

盛岡市立土淵小学校 六年 吉田歩

〈入選〉

はは、ともだち

『まえばちゃん』

盛岡市立青山小学校

一年 長澤 まどか

みんなの水を大切に

『水不足のサバイバル』

盛岡市立桜城小学校

二年 浅見 理空

楽しくおぼえる英単語

『マンガでおぼえる英単語』

花巻市立宮野目小学校

三年 小川 菜々子

命を大切にすること

『ハニーのためにできること』

盛岡市立中野小学校

四年 小野寺 朝妃

殺処分を減らすために

『100グラムのいのち』

宮古市立田老第一小学校

五年 島山 果蓮

「スケッチブック」を読んで

『スケッチブック』

北上市立黒沢尻東小学校

六年 千田 若奈

〈学校賞〉

宮古市立田老第一小学校

〈学級賞〉

宮古市立田老第一小学校

5年

〈佳作〉

「まえばちゃん」をよんで

『まえばちゃん』

一関市立川崎小学校

一年 千葉翔生

いねむりがたいへんなこと

『オニのサラリーマン』

宮古市立千徳小学校

二年 畠山純輝

大きな犬と、さいごまで

『ハニーのためにできること』

大船渡市立日頃市小学校

三年 木下優奈

そうぞうする力

『先生、しゅくだいわすれました』

北上市立鬼柳小学校

四年 大山真成人

ジョージのように

『ウソつきとスパイ』

宮古市立田老第一小学校

五年 伊藤玲奈

水不足で世界はどうなる

『水不足のサバイバル』

盛岡市立松園小学校

五年 菊池旺生

一年 最優秀賞

おねえちゃんのきもち、よくわかる！

奥州市立水沢小学校 一年

ちだ こはな

わたしにはおとうとがいます。あそぶときはたのしいけど、けんかをして、もやもやするときもあります。わたしとおなじように、おねえちゃんをがんばるきもちがわかるかなとおもってこのほんをえらびました。

いつもはころんでも、うそなきだったなっちゃんが、ほんとうにおおきなけがをして、にゅういんをすることになりました。おかあさんもつきそいでかえってこないの、こちゃんはさみしさとしんぱいでごはんがたべられません。わたしは、このきもちがよくわかります。わたしのおとうとも、はいえんでにゅういんをしました。おとうものからだのしんぱいと、おかあさんがいないさみしさでまいにちないていました。なのでおとうとがたいいんしたときは、とてもうれしかったです。こちゃんもなっちゃんがたいいんして、げんきにあばれているところをみて、あんしんしたとおもいます。わたしはおかあさんがかえってきたとき、「おかあさーん」とないてしまいました。だからこちゃんもわたしとおなじようにさみしかったですとおもいます。

わたしのおとうとはげんきになりましたが、いまでもせきがながびくとしんぱいになります。こちゃんも、なっちゃんがあばれるたびに、またおおきなけがをしないかはらはらしているのかなとおもいます。きつとわたしいがいのおねえちゃんも、おなじようにがまんをしたり、しんぱいをしたりしているんだとおもいます。でも、どのおねえちゃんもおとうとやいもうとのことがだいすきなんだとおもいます。

こちゃん！いもうとやおとうとのおせわたいへんだよね！わたしも、おもちゃをとられたり、しゅくだいのじまをされたりするからこちゃんのきもちよくわかるよ。でもぶくぶくので、かわいいよね。これから、いっしょにおねえちゃんをがんばろうね。

（図書名『おねえちゃんって、まいにちはらはら！』）

〈講評〉

4月^がに^{しょうがっこう}に^{にゅうがく}したばかりなのに、長い^{なが}文章^{ぶんしょう}をしつかり^{しか}書^かいていることに^{おどろ}驚^{おどろ}きました。

本^{ほん}の中^{なか}の^なこ^こちゃん^{ちゃん}と妹^{いもうと}の^なナツ^{ちゃん}ちゃんが、自分^{じぶん}と弟^{あとうと}に似^にていることで、こ^こちゃん^{ちゃん}の^なさ^さみ^ししい^い気^き持^もち^ちや^やナツ^{ちゃん}ちゃん^{ちゃん}を^{しんぱい}心配^{しんぱい}する^{きもち}気^き持^もち^ちが^{よく}わ^わか^かった^たの^{です}です^ね。それが^{ぶんしょう}文^{ぶん}章^{しょう}に^{あらわ}表^{あらわ}れて^{います}います。

毎日^{まいにち}は^{あら}は^らし^なが^らも、ぶくぶく^ての^て手^てを^{おとうと}した^{おとうと}弟^{あとうと}を^{かわい}が^いが^つて、「おねえちゃん」を^{おも}が^んば^つて^ほしい^いと思^{おも}い^{ます}ます。

二年 最優秀賞

ぼくのお父さんもサラリーマン!

盛岡市立杜陵小学校 二年

久慈廣多

ぼくのお父さんもオニガワラ・ケンさんとおなじサラリーマンです。この本をよんで、どのおうちのおとうさんもかぞくのために一生けんめいはたらいているんだなあと思いました。

オニガワラ・ケンさん(おとうちゃん)は、じごくカンパニーではたらいっているサラリーマンです。かつこいいスーツにがいこつのネクタイ、大きなかなぼうとおべんとうをもつてしゅっきんします。ケンさんはまい日、じごくのしごとをしていて、この日は血のいけじごくのかんしのかかりでした。おそくまでしゅくだいをてつだってくれたから、おべんとうを食べたらねむくなっちゃったんだ!そのうちにもうじゃがにげだしてたいへんたいへん!えんまさまにしかられてしまいました。

ぼくのお父さんもまい日あさ早くおきて、よるは「ただいま!」とへとへとなこえでおうちにかえってきます。それからおかあさんのてつだいをしたり、ぼくにべんきょうをおしえてくれたりします。でもつかれているときは、ごはんをたべたらすぐにねてしまいます。大きないびきはう

るさいし、「もう!、ベットでねてよ!。」とエンマさまのようなおかあさんにもおこられているけれど、どんなお父さんもぼくは大好きです。

オニガワラ・ケンさんとおなじように、お父さんもしごとが大へんだったり、いやなことがあったりするのかなあ。きつとたいへんなだろうなあ。おかあさんが、「廣多がやりたいことをやったり、すきなおもちゃをかえるのは、お父さんが一生けんめいおしごとをしてくれるからだよ。」とおしえてくれました。オニのサラリーマンもぼくのお父さんにもかぞくのためにがんばってくれているんだね。こんどおふるにいつしよにはいったら、かんさいべんでいってみようかな。

「お父ちゃん、いつもおおきに!」

(図書名『オニのサラリーマン』)

〈講評〉

本の主人公のオニガワラ・ケンさんは、廣多さんのお父さんと同じサラリーマン。どちらも家族のために一生懸命に頑張っている様子です。時には失敗したり、疲れて寝てしまうこともあるけれど、この本を読んだことで、サラリーマンのお父さんを見る目が変わったのが伝わってきました。

お父さんとお風呂に入った時に、言ってみましたか、「お父ちゃん、いつもおおきに!」って。

三年 最優秀賞

仲間とつくる「ひみつきち」

北上市立黒沢尻北小学校 三年

小林 蒼生こばやし あおい

「ひみつきちつくろうよ。」

この一言で、ケンカばかりしているぼくと弟は、なかよくなれる。二人で力を合わせてつくるバスタオルやカーテンのひみつきち。しまいけれど、この中でおやつをたべることもできる自分たちだけの場所だ。

だから、この本のひみつきちは、どうやって作るのか早く知りたくて、ワクワクしながら一気に読んだ。

一つ目のワクワクした所は、資材おき場での二人っきりのひみつのキャンプだった。それにしても保としようは本当にすごい。自分たちで毛布をはこんだり、お湯をわかすけいたいコンロやカップラーメンを持って行ったり。四年生なのに自分たちでしっかり考えて、実行できることにびっくりした。とちゅうでだれかに、ひみつの計画がばれるんじゃないかと、ぼくはちよっぱりドキドキしながら読んだ。

そして、二つ目は、いよいよカブトムシのたくさんいる山の中にひみつきちの小屋をつくる所だ。竹を切って組み立てたり、葉っぱをしいたり、ぼくと弟のひみつきちとちがつて本々くだった。

でも、雨がふって小屋の中に水がたまってしまったてがっかりした時は、もうやめちゃうんじゃないかなあ、さいごまで完成できるのかなあと心配になった。何日もかかって、いよいよ完成して、自分たちだけでとまれた場面は、ぼくもうれしかったしうらやましかった。

この本を読んで、おもしろそう、ぼくもぜったいやつてみたいな

あとと思った。場所は、前に野外炊事でカレー作りをしたことがある男山の森の中がいいなあといい、お母さんに話したら、

「いいよ、やってみたら。でも、本当にできる？」

と言われた。たしかに、今のぼくにはできるかどうか分からない。どうしてかという、ぼくはやりたいたいことがある、とちゅうでめんどくさくなつてやめたりすることがあるからだ。

保たちがひみつの計画がせいこうしたのは、ぜったいやるぞという強い気持ちがあったこととしっぱいしてもあきらめない気持ちがあつたことだと思う。

別の本に「ピンチは進化のチャンス」と書いてあつたけれど、ぼくも保たちみたいにしっぱいしても、くじけない心をもつてどりよくすれば、強い自分になれるかもしれない。

そして、いっしょに楽しいことができる仲間がいることも大切だと思つた。これは、きつとだいじょうぶ。ぼくには、信らいてできる友だちがたくさんいる。きつと、ひみつの計画にもさんせいしてくるはずだ。

いつか、ぜったいに保たちみたいに自分たちだけのすてきなひみつきちを作るぞ！

(図書名『秘密基地のつくり方教えます』)

〈講評〉

ワクワク、ドキドキしながら読み進め、読書を楽しんだ様子が伝わってくる感想文です。自分の秘密基地作りの経験と比べて読み、登場人物の行動に感心したり、自分だったらどうするのか考えたり、十分に読み味わうことができました。また、その思いを素直な言葉でテンポよく表現することができました。あきらめない気持ちを学び、秘密基地作りへの思いをさらに強めた蒼生さん。どんな秘密基地を作っていくのか楽しみです。

四年 最優秀賞

宿題忘れるのも楽しいやない

北上市立黒沢尻西小学校 四年

豊巻 慶とよ まき けい

楽しい夏休み。二十四日間も長い間、学校が休みになる。何をしようと考えただけで、わくわくしてくる。でも、そんなばくをなやませるものが一つだけある。それは、夏休みの宿題。ふだん、学校がある時よりもたくさん出される。ドリルに、一人勉強ノート、工作に自由研究。宿題をさければ、本当に楽しい夏休みになるのに。そう思っていたばかりの目にこの本の題名が飛びこんできた。「先生宿題わすれました。」といってゆるされるなら、どんなに楽だろう。

この言葉に言いわけをしたゆうすけくんにえりこ先生が付けた条件は二つ。すぐにばれるようなものはだめ。聞いた相手が楽しくなるようなものじゃなくちゃだめ。しゅくだいをしなかった言いわけなら、いくらでも思いつく。おなかがいなかったとか、習い事で時間がかかったとか。でも、これじゃあ宿題しなかった言いわけにならないし、きつとすぐにばれてしまいうちがいない。何より、こんな言いわけじゃ、だれが聞いても楽しくなかならない。

ゆうすけくんや友達のうちゆう人に出会ったうそや野ねずみを助けたうそはなるほどと思った。うそだとばれないかといえどそんなことはないかもしれない。そんなに都合よくうちゆう人があらわれるわけがないし、ましてや昔話のように野ねずみが助けたおん返しをしてくれるわけがない。でもこのうそは聞いていて楽しくなる。うちゆう人ってどんなかつこうをしているのだらう。野ねずみにおん返ししてもらうなら、どんなことをしてもらおう。考えるだけでわくわくしてくる。ぼくはどんな言いわけしよう。ぼくがかって

いるセキセイインコのライムちゃん。最近、言葉を少しずつおしゃべりをするようになったんだけど、家に帰ったら大変な事が起きた。ライムちゃんが人間と同じようにおしゃべりできるようになっていったんだ。それが嬉しくてずっとおしゃべりしていたら、宿題ができなかったのはどうだろう。なかなかいい言いわけだと思う。かわいいうちちゃんと一緒にしゃべりできたなら、きつと楽しくてしかたない。これじゃあ、一日宿題ができなくてもしょうがない。もしかしたら多くの担任の先生も許してくれるかもしれない。

そう思ったけれど、今は夏休み。今年の夏休みは二十四日間ある。あと二十三こどんな言いわけを考えよう。色々と考えてみたけど、ぼくにはなかなか思いつかない。かんたんにウソだとばれずに、聞いた人が楽しくなるような言いわけって、実は宿題をきちんとやることよりもずっとずっと難しいって事に気がついてしまった。たまに言いわけをして宿題をさぼりたくなっちゃう気もちはわかるけれど、やっぱりさつさと宿題を終わらせて、遊びに行こう。そして、今年の夏休みも暑さに負ずに、思いっきり楽しみたいと思う。

(図書名『先生、しゅくだいわすれました』)

〈講評〉

慶さんの感想文は、一気に書き上げたような印象を受けます。本の楽しさを十分に味わい、次々と思いや考えが浮かんできて書き進めていった感じです。自分の言いわけを考えると、楽しい想像がどんどんふくらんでワクワクしている様子が、テンポのある生き生きとした書きぶりで伝わってきます。最後には、言いわけは宿題をやることより難しいと気付いた慶さん。宿題を早く終わらせて、楽しい夏休みになったことでしょう。

五年 最優秀賞

残菜とゆうなと給食と

宮古市立田老第一小学校 五年

飛澤 咲良

給食の食べ残しが多い原因って、どこにあるのだろう。そして、解決策って何があるのだろう。本を閉じて、そんなことを真っ先に考えた。ゆうなの委員会の話し合いでは「給食のメニューは自分たちで考える」「給食のおばさんたちに料理の仕方を教える」という意見が出ていた。けれども私もゆうなが考えるのと同じように、それはおかしな解決策だなと思った。それは、食べ残して、そもそも食べる側の私達に問題があると思うから。だから、その責任の多くは生徒の方なはず。実は私も好き嫌いが多いから、ゆうな達のことを何だかんだと言える立場じゃないのだけど。でも、だからこそ真っすぐに考えたい。

香坂君の考えた給食メニューは、確かにおいしそうだと思う。オムライスにハンバーグ、パスタにカレー。きつと私もこれなら残すことはあまりないように思う。でも、栄養バランスはどうなんだろう。一見、炭水化物に偏っているなあという印象を持つメニューだ。パンビ先生に聞いてみると、やはりダメ出された。でも、ダメ出しされた理由は盛り沢山。まずはカロリーオーバーに始まり色々な栄養素が足りない。特にびつくりしたのは、香坂メニューじゃ、カルシウムが異常なほど足りない。こんなのを本当に食べ続けたら、私達は背の小さな肥満体になってしまうということ。そう言えば、香坂メニューは「残菜として多いものは子どもに人気のない食材だから、それはメニューの中には採用しない」という考えで作られたメニューだった。だとすると、バランスという視点で考えたら、偏

らない方がおかしいって言える気がする。

他にも、味つけがお家のものとは違って、塩味うすめで、味気ない感じがする。香坂君の言うように調理する人に問題があるのかなと思っていたら、それも違うってことがゆうな達のおかげで分かった。

ゆうなと一緒に給食委員となることで、給食っていうものは、それを食べる私たちが健康でいるために、最高のバランスでありながらカロリーも丁度よく作られていることが分かった。そして、食中毒のような、食べるものが原因で病気が広がることのないよう、調理の方法もよくよく考えられているんだってことが初めて分かった。何より、私達に安全で安心な食事をさせようとがんばってくれている人達が、心を込めて作ってくれているんだってことにも気がついた。

私は毎日のように給食を目の前にしている。きつと、これをして残さず毎日食べるなら私は最強になれるんだと思う。でも、どうしても嫌いなメニューや不得意な味には積極的にはなれないが、そのたびに作ってくれている人を意識し、一口でも多く口に運べるよう努力したいと思った。食べたもので私の体は作られる。バランスが良いなら、体内のバランスも良くなるはず。今日から頑張ります。

(図書名『がんばれ給食委員長』)

〈講評〉

この本を読んで、真っ先に考えたことを最初に書き、印象に残ったことが分かります。

問題意識をもつて読み進め、調理する人がどんな思いで、どんなことに気を付けて作ってくれているかに気付き、嫌いなメニューや不得意な味も、一口でも多く口に運べるよう努力したいなど、自分の言葉で素直に述べてあり、自己変革が感じられます。

段落の付け方も適切であり、題名にも工夫が見られます。

六年 最優秀賞

自分と向き合う

滝沢市立滝沢第二小学校 六年

新沼 奎華

お盆は、祖母祖父とお墓に行き、お墓をきれいにふいておがみます。毎年繰り返してきたお盆の墓参りは、亡くなった人をなぐさめ幸せを祈るご供養です。私はこの本を読んで、今まで知らなかった「供養絵」というご供養のかたちを知りました。

供養絵とは、亡くなった人が「もし生きていたら……」と未来を想像して描く絵です。

私は紗理奈が西清寺で、母親の描いた供養絵と出会った場面がとても印象的でした。住職さんの言葉が紗理奈の心を救ったからです。紗理奈は、学校で絵の賞のことであわさされて傷ついていました。その上、大切に思っていた友達ともうまくいかないような気持ちになって町から逃げるようにして遠野の祖母の家に行きました。そして、亡くなった母親の事を知りたくて調べているうちに母親が描いた供養絵にたどり着きました。その絵を見ていた時に住職さんが、「綾さんは、この九年、あなたに寄りそっていらしたことを思います。それはあなたが生きている以上変わりません。」

ときっぱりと言ってくれたのです。私は祖父が亡くなった時、祖母に、「奎華達のことをいつもじじが見守っているよ。」

と言われたことがあります。私はその言葉のおかげで涙をこらえることができました。つらいことがあったばかりの紗理奈にとって、この言葉は心の奥底までひびき、自分を見守ってくれる母がいるという安らぎに包まれることができたのだと思いました。母親も紗理奈と同じように絵が好きだったことを知ったことも紗理奈を勇気づ

けたと思います。

そして、私は読んでいくうちに紗理奈にたいして「こんなふうになりたい。」とあこがれを感じるようになっていきました。それは、紗理奈が供養絵を描くことを決心して、東日本大震災でなくなった広歌さんの姿を納得がいくまで描き続けたからです。紗理奈は目標があるとそれに向かって進み続けて行きます。私は覚悟が足りなくて、向き合うことがこわくなって前に進むことができなくなることがあります。だから、向き合い続ける紗理奈の勇氣にあこがれます。そして、自分の心と向き合うことは大切だと学びました。

最後の場面で、景子さんは紗理奈の供養絵の中に、夢にまで見た娘の広歌さんが実在していることを感じて、泣きながら感謝を伝えていました。広歌さんといった家族写真が一枚もなくてさびしがつている景子さんにとっては本当にうれしかったのだと思いました。自分の心に向き合い、自分もお母さんも好きだった絵を通して人によりそうところが、紗理奈を強くし、周りの人も幸せにしたのだと思います。

私も自分の心と向き合って、目標を持って歩み続けていきます。

(図書名『スケッチブック』)

〈講評〉

奎華さんは、この本を読み進めていくうちに、主人公の紗理奈と自分を重ね合わせ、目標に向かって進め続ける勇氣にあこがれ、向き合うことの大切さに気付くことができて良かったですね。

最後に、目標を持って歩み続ける決意を言い切ったことは、素晴らしいです。欲を言えば、具体的な目標にも少し触れてほしかったです。

まとめを工夫すれば、さらに良くなります。

岩手県小学校長会長賞（低学年）

おねえちゃんになつてよかった

盛岡市立厨川小学校 二年

小つじ か歩

ココちゃんのいもうとのナツちゃんは、いつも、なにがあつてもへっちゃら。でも今日のナツちゃんはちがつた。頭をうつてびよういんにいったままかえつてこない。わたしは、とってもそわそわした。ココちゃんは、まっ先におかあさんにみてもらうつもりだった百点のテストのことをわすれてしまうくらいナツちゃんのことをがしんばいでたまらなかつたんだね。元氣にあそびまわっているのがあたり前のナツちゃん。だから、ひとばん入んただけなのに、なん日も会っていないように長くかんじたんだね。

ココちゃん、わたしにも一さいのおとうとがいるよ。おとうとは、まだ赤ちゃんで言うことがきけない。ナツちゃんと同じ「かいじゅう」なんだ。わたしがねていると頭におもちゃをなげてくるし、いっしょにあそんでもすぐぐちゃぐちゃにこわす。それに、わたしの大きなおかあさんをよこどりしていくし。でもね、ナツちゃんとココちゃんのお話を読んで、わたしは、「おねえちゃん」の氣もちに氣づいたよ。わたしのおとうとがねつを出して、なん日

もさがらなかつたときに学校でも、しんばいでたまらなかつたから。

ココちゃん、わたしもこれからおとうとのことをもつと大切にしようと思うよ。だつてたつた一人の大切なおとうとだから。あそびたいものも見たいテレビもすきなこともちがうけどわたしもおねえちゃんだから、これからもたくさんあそんでずつとずつとおとうとをまもつてあげるよ。おねえちゃんつて、たいへんだけわたしは、まい日とてもたのしいよ。そのことをココちゃんがおしえてくれたんだね。ありがとう、ココちゃん。わたし、おねえちゃんになつてよかった。

（図書名『おねえちゃんつて、まいにちはらはら！』）

〈講評〉

か歩さんには、ココちゃんの氣持ちがよくわかつたのですね。「おねえちゃん」の氣持ちが、弟や妹がいることで、いたずらされたり、お家のかたを横取りされたように感じたりして、大変なこともあるけれど、弟や妹のおかげで、毎日が楽しいつていえるのは、素敵なことです。

この本を読んで、「おねえちゃんになつてよかった。」と文章に綴ったことを、たまに思い出してくれると嬉しいです。

先生の本当の目的は

宮古市立山口小学校 四年

箱石香乃

「先生、宿題、忘れました。」

なんて言えない。だって、そんなことを言うのははずかしいもん。私も、もし宿題を忘れてしまったら、ゆうすけ君みたいにウソ、ついちゃうのかなあ。ゆうすけ君はやり忘れた宿題を、怒られないようにかくそうとして、ウソをついた。でも、先生の質問に答えるたびに、友達にそのウソがばらされちゃう。すると、えりこ先生が、

「ウソをつくなら、すぐばれるようなのはだめ。聞いた相手が楽しくなるようなじゃなくちゃ。」

って、びっくりするようなことを言った。本当にそれでいいわけ？ ウソつくなんて、ダメなことだと思っただけ……と、私の心はウソと本当の間を行ったり来たりウロウロした。

心がまよう私をよそに、次の日からクラスみんなの「宿題できなかった物語」が語られる。ゆうすけ君は宇宙人にかけて算九九を教えたらしい。しかも、九九を歌にしてダンス付きで教えたって話だ。あり得ないけど、すごく面白かった。りなちゃんだって負けてない。迷子の野ねずみ赤ちゃんを、パパやママのところに帰してあげたら、そのお礼をされたんだって。さすが、みんなは先生に言われた通り、すぐにはばれなくて、誰も傷つけないっていう条件に合うお話だった。

でも、待って。こんなにしっかりした物語を作るのって、ものすごく時間がかかるはず。私が国語で物語作りをしたときも、四十五分の授業時間じゃできなかった。多分、ゆうすけ君やりなちゃんも時間がかかったはず。じゃあ、宿題をやった方がもっと短時間で終

わるんじゃないのかな。そう思っていたら、やっぱり、いたいた。「やっぱり、宿題やった方が楽だよな。」

ってつぶやく人が。宿題できなかった物語がクラスを一巡したら、ネタがつきてきただろうし、第一、あんなていねいなお話作りをするには、ものすごい時間がかかるはずだ。

もしかしたら、これは先生の作戦だったのかもしれない。クラスみんなが宿題をやることの必要を感じてやってほしい、そんな思いを先生は持っていて、仕組まれたことだったように思う。宿題をやることは先生に言われたからやるんじゃない、自分でそうしたいって思わせるため、ちよつと遠回りした。こうやって、宿題の方がいいと自分で決めたんだから、やらされている感じは一つもない。こんな体験をしたら、どんな子でも気持ちよく進んで宿題に取り組むことができると思う。中には、ふつうの宿題をもっとやりたいって希望する子もいるように思う。

そんな先生も「宿題用意できなかった物語」を聞かせてくれた。こうやって、ふだん自分がやっていると、ばれないウソをつくこととのどちらが楽か比べつつ、みんなの大変さを味わったんだよね。すごいね、えりこ先生！

（図書名『先生、しゅくだいわすれました』）

〈講評〉

楽しい本の内容から一歩踏み込んで、先生の目的に目を向けて読み進めたところに香乃さんらしさが表れています。「本当にそれでいいわけ？」と問いをもち、読んでいく中で自分なりの答えを見つけ出すことができました。物語の中に入り込み、先生や学級の子どもの気持ちを豊かに想像して読んでいることにも感心しました、「私の心はウソと本当の間を行ったり来たりウロウロした。」などの表現力も見事です。

それぞれの一步

宮古市立宮古小学校 五年

大村光介

転校してすぐ苦手な運動に挑戦することになってしまった水口さん。自分の心に正直になれず悩み続ける中谷さん。そして、どこか不器用で、それでいてまっすぐな心を持っているキャブテン克哉。

それぞれの頑張りに、ハラハラしたり、そうだなと相づちを打ったりしながら、僕も三十人の仲間の一人になった気分が続いた。

まずは、水口さん。学年途中で転校なんて考えられない。不安だらけだったろうに、何とかクラスの仲間の一人になるためにすごい努力をし始めた。

皆のため、クラスの目標そして夢のためと十秒台でしか走れなかった自分と戦い続けた。

「もう無理、やっぱりやめる。」

と言ってしまえば楽になっただろうに、ダメ出しをされ続けても逃げなかった。

そんな水口さんに付き合ひ続けた克哉。かつこいい。かつこよすぎる。

はじめのうちは、足手まといになってほしくないから意地悪しているのかもしれないいやなヤツと思っていた僕。

でも、どんなにイヤ味を言われても練習をやめなかった水口さんから、僕の単純な考えを否定された。

きつと、その練習の中でお互いの良い所に気付いていったんだろ
うなあ。

次に、中谷さん。何でもよくできて、誰からも信頼されるスーパ

ーウーマン。

悩みなんてこれっぽっちもないみたいな女の子なのに、自分の心に正直になれなくてモヤモヤした気持ちを持ち続けている感じがする。

おく病で、意気地なしで、弱虫で、傷つきやすく、傷つくことがこわくて、不器用でそれが本当のあたしだと気付いてからは、誰かをねたんだり、しつとすることをやめて自分に正直になろうと決心しているところはすごいと思う。

外から見ただけでは、人の心の中ってなかなか分らないのだなあと思った。みんな、何だかんだと悩みをかかえているのかもしれない。

そこから逃げないで、正面から向き合うことが一番の解決方法なんだと教えられた。

そのことに気付かせてくれたのは、克哉。水口さんや中谷さんの悩みと比べられないくらい大変な問題をかかえていたとは。

でも、どんな時も逃げなかった。それどころか常に前へ前へと進んでいる感じがする。

こんな三人と心をひとつに走り切った仲間達。いろいろ心のすれちがいを乗り越えて夢に向かって思い出作りができて良かったと思っているにちがいない。

一人ではできない夢。仲間がいるからこそ挑戦できた思い出作り。それぞれの一步が集まって、大きなぼくらの一步になったんだな。

（図書名『ぼくらの一步』）

〈講評〉

登場人物に共感し、自分と比較し、考えを深めることにより、悩みから逃げないで正面から向き合うことを学んだことは、大きな収穫ですね。さらに、一人ではできない夢を仲間と一緒に挑戦でき、それぞれの一步が集まって、ぼくらの一步になったことを、しっかりとわができました。よく読み取っています。

ただ、形式段落と意味段落の関係、文末表現やまとめの工夫の吟味がほしいです。

岩手県学校図書館協議会長賞（低学年）

なぞなぞはむずかしい

盛岡市立中野小学校 二年

押川 笑

この本には、いろいろな店が出てきます。文ぼうぐやさんや本やさん、手げいやさんなどです。たとえば、ケーキやさんでは、こんななぞなぞが出ます。

「あまくてすっぱいすきとおったほうせき、さていったいなあに？」

私はさいしょ、答えが全然分かりませんでした。それでも、絵をよく見て考えたら、答えは「アメ」だと分かりました。

私が一番むずかしいなと思ったのは、薬やさんにある問題です。

「ひっぱられてもおされてもからっぽにされてもかきまわされてもまつたくへっちゃら、さていったいなあに？」

絵を見ても全く分かりません。分からなくて、ついに答えを見ました。答えは「引き出し」でした。

「薬やさんにかんけいがないじゃん！」

と私は思いました。

た。私は、薬やマスクなどしょう品ばかり見ていました。絵の中には、しょう品だけではなく、エアコンや買いものをする人、カエルのおきものなど、いろいろなものがあることに気がつきました。

私のママは、コーヒーが大好きです。私が大きくなったら、ママと一しょにコーヒーやさんをやりたいと思います。その時、おきやくさんに、どんななぞなぞを出したら、おもしろいかなと考えてみました。

「入れれば入れるほどのうこうでまろやかになる、さていったいなあに？」

さつそく、ママになぞなぞを出してみたらママはあつさり「ミルク」と正かいました。

むずかしい問題を考えるのは、大へんだなあとかんじました。大人になるまでに、まだまだ時間があるので、それまでに、ママがなやむようななぞなぞを作りたいです。

〈講評〉

（図書名『なぞなぞのみせ』）

笑さんは、絵本の中の絵を一つひとつ詳しく見て、なぞなぞの答えを探しました。なぞなぞの答え以外にも、細かいところたくさん発見があったのではないのでしょうか。何度も見ると、そのたびに、「こんなものまである！」と驚くことと思います。

本を楽しんだあとに、家族にもなぞなぞを考えて、出してみたなんて、すごい！大々になるまでに「笑さんのなぞなぞの本」が出来上がるかもしれませんね。

岩手県学校図書館協議会長賞（中学年）

上手なウソって大へん

花巻市立宮野目小学校 三年

吉田 景都

「先生しゅくだいわすれました。」この本のだい名を見て、わたしは、こんな風にはつきり言えたらどんなにいいのだろうとوراやましく思いました。わたしはしゅくだいをわすれたことがありません。先生やお母さんにしかられたくないからです。もしも、しゅくだいをわすれてしまったら不安で心配でたまりません。だからどんなにつかれています、ねむくても、しゅくだいをします。でもわからない問題があるという後回しにしてしまうことがあります。そのままにしていると、お母さんに「しゅくだい終わってないじゃない。」と言われてしまいます。わたしは、「後でやろうと思っていた。」と言います。お母さんはさらにきげんがわるくなり「いいわけはいからしゅくだいをしなさい。」と言います。

主人公のゆうすけもねむくとしゅくだいを後回しにしました。わたしは、ゆうすけの気持ちがよく分かります。わすれているのではないし、やらなければいけないということも分かっているのです。わたしはむねがきゅつとしめつけられました。

わたしは、ゆうすけがたんにんのえり子先生にしかられると思いました。でも、えり子先生は、上手なウソをつけばしゅくだいをわすれてもいいと言いました。わたしはおどろきました。しゅくだいをしなくてもいいし、しかもウソでいいわけをしていいんだなんて信じられません。ゆうすけたちのウソは、どれもとても楽しく、上手なものでした。さいしよは、しゅくだいをしなくてもいいようにひっそりついたウソだったと思います。それがだんだん自分が作っ

たウソを発表して先生やクラスのみんなによるこんでもらえるウソになり、楽しくなったんだと思います。中でも一番の話はえり子先生の話で、少しこわくふしぎな話にドキドキして、思わず本を持つ手に力が入りました。次は何がおこるんだろう、どうなるんだろうとまるで四年二組にいるような気持ちになりました。

ふと、どうしてえり子先生はウソをついたのだろうと思いました。えり子先生にはしゅくだいがないからです。その時、わたしは、しゅくだいを作る先生方も大へんなんだと気づきました。それでもがんばって問題をつくるのは、わたしたちに毎日べん強をしてほしいからだと思います。だから、しゅくだいを後回しにしたくなった時は、先生が問題を作ったことを思い出そうと思います。

でも、わたしもしゅくだいをやりたくない事もあります。ためしにお母さんにウソをついてみました。「きのう、コーヒーをのみすぎてぜんぜんねむれなかったんだよ。今はねむくとしゅくだいができない。」お母さんは、へんな顔をして「はやくしゅくだいやってしまいなさい。」と言いました。上手なウソをつくのって大へんだね、ゆうすけ。

（図書名『先生、しゅくだいわすれました』）

〈講評〉

宿題を忘れたことがない景都さんが、お話の思わぬ展開に引きつけられ、物語の世界にひたって読んだことが伝わってきます。特に担任の先生のウソを読んだときのドキドキが「思わず本をもつ手に力が入りました。」「まるで四年二組にいるような気持ちになりました。」という表現からよく分かります。そして、先生がウソをついた理由を考えることで感想を深めることができました。ためしのウソも楽しいものになりました。

協力することの大切さ

宮古市立山口小学校 六年

川戸綾乃

私は、いとうみくさんが書く物語の世界にあこがれる。今回読んだ「ぼくらの一步」と、以前読んだ「糸子の体重計」は、どちらにも主人公が目標に向かって頑張る姿、それらを見守っている仲間の姿と友情が描かれている。「糸子の体重計」では、私との共通点がいくつもあった。そして、「ぼくらの一步」を読んだ時も、登場人物と自分を重ねることで、物語の世界の中で迷い、考え、これからの自分の生き方を一生懸命考えることができた。

水口萌花は、六年生の二学期に転校することになった。転校先で、三十人三十一脚に誘われて、思い切って引き受けた。私も、水口さんと同じだ。でも、少しちがう。私だったら、「えー」とか「足を引っ張ったらどうしよう。」とか不安になるけれど、「でも、断って、みんなにきられたらどうしよう。」という後ろ向きな思いが勝って、結果、引き受けるという感じだ。でも、水口さんは「せっかく誘ってくれたから」って引き受けた。私は、水口さんは、素直な人だと思ったし、その前向きな気持ち、少しうらやましいと思った。

その日から、毎日きっちり練習した。全員で走ったときは、思うように結果が出なかった。水口さんは、そんな自分が悔しくて、無性に腹が立って、ついに逆ギレをしてしまった。私は、この時の水口さんの気持ちが、よく分かる。私だって、うまくいかなかったり、思うようにならなかったとき、腹が立って、同じようなことをしてしまうから。そんなとき、私には、話を聞いてくれて、アドバイスをしてくれる友達がいるからありがたい。水口さんが逆ギレをした

とき、鈴木さんと林君が「嫌だ。」と言い出したり、何人かが目配せをし始めたりした。その場の嫌な空気になっていく場面を読んでいるだけで、私の嫌な記憶が思い出されて心が痛む。そのとき、「あたしは、ただみんなと、大会に出たい。」と、中谷さんが、声をふりしほって言った言葉が私の心にひびいた。中谷さんのこの言葉は、練習がうまくいかないモヤモヤや、ぎくしゃくした友達との関係をふき飛ばす言葉だと思ったからだ。

蒼井君やみんなが思っていることは、私にも分かる。大会で優勝したいという気持ちだったのだろう。でも、その思いで周りの仲間のことが見えなくなってしまう。そんな優勝はさみしい。優勝を目指すからこそ、協力しなければならぬのだと思う。私も「協力」という言葉をよく使うが、何をすれば協力になるのかはあいまいだった。私が、この本を読んで考えた「協力」は、「自分のことだけでなく、相手のペースを考えて、相手の個性を尊重して、相手のことを大切に考えて行動する」ということ。だから、私は、これからの学校行事などで、この物語で学んだ「協力」を実践したいと思う。小学校六年間を仲間と笑顔で卒業するために。

（図書名『ぼくらの一步』）

〈講評〉

この本を読み、協力することの大切さを学ぶことができたことは、大変良かったですね。

登場人物の気持ちをつかみ、自分の考えと比べながら、「協力」とは何かという自分なりの定義は、「相手の個性を尊重して、相手のことを大切に考えて行動すること」ととらえたことは、素晴らしいことです。

今後、学校生活でも、地域でも、社会人になっても、生きていくには大切なことです。この気持ちを忘れずに、実践を期待します。

オニもにんげんもおんなじだね

盛岡市立城南小学校 一年

きりた けいこ

「オニのサラリーマンなんているのかな。」

ぼくはこのほんのだいめいをよんで、ふしぎにおもいました。オニのサラリーマンなんてきいたこともなかったからです。オニがどんなおしごとをしているのか、わくわくしながらよみはじめました。

オニのサラリーマンは、なぜかかんさいべんです。オニはこわいけど、かんさいべんだとちょっとだけやさしそうなかんじがします。

でも、やっぱりオニのしごとは、じごくでした。ちのいけじごくのみはりばんなんてほくならやりたくないです。えもちよつとこわいので、ぼくは、

「やっぱり、じごくじゃなくててんごくにいききたいな。」とおもってしまいました。

そんなオニのサラリーマンにも、じつはかぞくがいます。おくさんと、ふたりのこどもです。オニのサラリーマンは、オニのおとうさんなのです。おひるには、おくさんのつくつてくれたおべんとうをたべるのがたのしみです。

ぼくは、このおべんとうをたべるところが一ばんすきです。めがめだまやきで、はながトマトで、おとうさんのおおになつてゐるのがいいなとおもいます。ぼくも、じぶんのおかあさんのおべんとうが一ばんすきで、まいにちたべたいし、いろいろがんばったあとにたべるとくにおいしいので、オニのおとうさんもおんなじなんだなとおもいました。

ぼくのおとうさんとおかあさんもおしごとをしていて、サラリーマンです。ふたりとも、いつもぼくやおとうさんのためにおしごとをがんばってくれているので、オニのおとうさんとおんなじだとおもいます。ぼくもおとなになつたら、おとうさんやおかあさんやオニのおとうさんみたいに、かぞくのためにがんばるひになりたいです。

（図書名『オニのサラリーマン』）

〈講評〉

習ったばかりのカタカナを頑張って書いてくれました。サラリーマンのオニだなんて、初めて聞くけれど、なんだか、けいこさんのお父さんやお母さんと同じところがたくさんあるみたい。

オニガワラ・ケンさんが奥さんに作ってもらったお弁当を食べるところが一番好きだと書いてありましたね。家族のために頑張っているオニガワラさんを奥さんも応援しているのでしょう。けいこさんもお父さんやお母さんを応援して、家族のために頑張る人になってください。

命と向き合うということ

軽米町立晴山小学校 四年

古館和華

私が、この本を読むきっかけをくれたのは、母でした。さく年の春、秋田犬をかいはじめた。私にぴったりとすすめてくれました。私は、何がぴったりのだろうとふしぎに思いました。

しかし、本を読み始めてすぐ、ぎ問の答えは見つかりました。主人公のふたばと私は、にた立場だったのです。私が、強く希ぼうして、秋田犬を家族にむかえたように、ふたばもおばあちゃんがなくなつた時、ハニーという年より犬を家族にむかえました。ハニーは、ふたばの家に来て間もなく、悪せいリンパしゅという血液のガンになり、残り少ない命になってしまいます。ふたばは、不安と悲しい気持ちでいっぱいだったと思うけど、ハニーの息がとどえるまで、ハニーの気持ちを一番に考えて、お世話をしました。

私は、この本の中で、ハニーのことから目をそむけない、ふたばのすがたが強いように残りました。ふたばが、ハニーを大切に思っていたように、私も秋田犬のりゅうは、いっしょに遊ぶ弟のような、時には、ぐちも聞いてくれる親友のような、いなくてはならないそんざいです。もし、ハニーのように病気になるたら、私は何が一番りゅうのためになるかと冷静に考えられないと思います。ましてや、弱っていくすがたから、目をそらさずにいられるかと考えると、自信がありません。ふたばは、ハニーのどんな行動もどんなすがたもみのがさず、ハニーにとつてがんばるみなもとだったと思います。ハニーの意識がなくなる少し前に、ふたばのよびかけに、しつばをふつたのは、「ありがとう」という気持ちの表れだったのでは、と思いました。

私は、この本を読んで、命あるものをかうことは、命と向き合うことだということが、分かりました。ふたばもハニーを引きとる時に、生き物をかうことは大変なことだとお母さんに言われていました。私も同じことを母から言われました。私は、世話のことだと思っていたけど、考えがあまりかたかったのだと気づきました。病気になるなくとも人間よりじゅ命の短い犬は、先におい、死にます。私は、みとるかくごが必要なのだと思います。そして、しゃべることできかない犬は、人と同じで顔を見たり、行動から気持ちを感じとる必要があります。今まではあまり気に止めることなく見てきたすがたも、今からは何か変化はないか気をつけて、ハニーのように、りゅうにも楽しかったと思つてもらえる生活にしたいと思いました。また、生き物をかうとしていてる人が周りにいたら、世話が大変なこととはあたり前で、命と向き合い、よりそうことをかくごして決めてほしいとおねがひしたいです。そして、考えてかう人がふえ、ハニーのように幸せな動物がふえたらうれしいと思います。

（図書名「ハニーのためにできること」）

〈講評〉

主人公と同じ立場であることに気付いた和華さんは、主人公に寄り添い、共感しながら読むことができました。「自分だったらどうなのだろう。」と自分自身に問いかけ、見つめ、考えを深めていったことが伝わってきます。そして、「命あるものをかうことは、命と向き合うことだ。」という考えから、一冊の本を通して成長した和華さんを感じることがができます。飼犬の「りゅう」への温かいまなざしが目に浮かぶようです。

スケッチブックがつかないだもの

宮古市立田老第一小学校 五年

佐々木 凜太

もしも、自分が紗理奈だったらどうしただろう。お母さんが、もうこの世にいないと感じた瞬間から、考えられないほどの悲しみに包まれることは簡単に想像できる。そしてきっと、自分の部屋に閉じこもり、うずくまったまま当分出てこれない気がする。

一方の亡くなってしまった瞬間の紗理奈のお母さんも、まだ幼い二人の子どもを残してこの世を去らなければならないことが分かった時、ばく以上の悲しみと苦しみに包まれたのではないか。だから、死の床にいる自分のそばで紗理奈と一緒に寝ると言って聞かなかつたとき、彼女の体に残る「お母さんとしての記憶」が、涙となって現れたと思う。

紗理奈は弟を、どこか恨めしい気持ちを持って接していたように思う。それは、お母さんの死は、弟の出産によって引き込まれたようなものと思っていたら、何より弟の方が母に似ているところ、それから、何かと危ないめに遭いそうになると「虫の知らせ」とも思えるお告げみたいなものが弟にあつて助かるところ。それは、紗理奈にはない。正しくは、紗理奈が「自分の母に似ているところはないと思ひ込んでいた」だろう。

それを証明してくれたのは、逃げるように行つたはずの遠野。そこにいる「綾を知る人達」によって、紗理奈の思ひ込みは溶けていった。まるで、だんだんに暖かくなる早い春の風に、厚く凍った地面が溶けていくように。もしかしたら、紗理奈の母の魂がそこに導いたようにも思う。

ぼくが何より心をうばわれたのは、綾と同じように紗理奈が供養絵を描いていたこと、そして自分がやっていたことは供養絵であつたことを知り、それを描きたいと強く願ひ、実際に描いたことだ。親子だからこそ似たとも言えるだろうが、それだけではないように思う。もしかしたら、たくさんの妖怪伝説のある遠野だからこそ、紗理奈もそうなのかもしれない。いずれ、紗理奈は自分のルーツとも言える母の実家や母とつながりのある人々が、もつれてしまつた紗理奈の感情を元に戻し、自分の思ひを解き放つことのできる絵を描くということを取り戻すことができた。そして何より、自分の中に確かに母がいることを強く強く実感できたと思う。

八月は、お盆の月。だから、盆の棚を作つたりお墓参りをしたりした。盆棚や墓参りのときは亡くなった人の好きだったものをお供えする。中には、故人が生きていたとき食べさせられなかつたからお供えする場合もあるだろう。供養絵はそれと同じだとぼくは気づいた。亡くなった人が生きていたなら、こうであつただろう、こんなことをしてあげたい、でも、現実にはできつこない。だからこそ、その思ひには自分の身を切るような思ひがこめられていると感じる。ぼくも自分自身をつないでくれた人達を思ひ、手を合わせたい。

（図書名『スケッチブック』）

〈講評〉

自分が紗理奈だったら……。の書き出しに引き込まれます。主人公の立場になつて考えお盆行事と供養絵を結び付け、先祖を思う心が大きく膨らむ感想は、素晴らしいですね。

主人公と自分を重ね、考えながら読み進めることは、読書には大切なことです。凜太君は、よく読み取つてることが分かります。

凜太君が、この本から学んだことを忘れずに、今後に生かして欲しいです。読書の秋です。良い本をたくさん読んで下さい。

審査を終えて

第七十一回夏休み良書推薦運動読書感想文コンクールには、県内の小学校から九十名（低学年三十名、中学年二十五名、高学年三十五名）の作品が寄せられました。例年より少ない応募数ではありましたが、本に親しみ、感想文を書くことによって、自分の考えや思いを深めている作品が多いことを嬉しく思いました。ご指導された先生方、ご協力いただいたご家族の皆様方には、本当に感謝いたします。ありがとうございました。

今回の審査を通して感じたことをいくつか述べてみたいと思います。これから感想文を書くときの参考にさせていただけたらと思います。

【低学年】

全体的に素直な言葉で表現している作品が多く、お話を讀んでどきどきしたり感動したりしたことが、しっかりと伝わってきました。また、お話の中の主人公と自分を重ね合わせたり、自分自身の生活を振り返ったりしながら読むこともできています。まとめの部分には、これから頑張りたいと思ったこと、家族への感謝などが上手に書かれ、大変効果的な終わり方になっていました。

これから頑張つてほしいのは、八百字という字数を存分に使い、書き切つてほしいということです。よい文章を書くには、相応の字数が必要です。思いを豊かに表現するには、日常生活の一場面にも感動したり考えたりする経験を重ね、自分の言葉をどんどん増やしてください。

【中学年】

中学年の皆さんは、千二百字しっかりと書けている作品が多く、感心しました。本の選び方も上手で、よい本選びがそのままよい感想文につながっていると感じました。比喻や体言止め

が効果的に使われ、リズムのよい文体で、表現の工夫も見られました。また、題名のつけ方にも学びたいところがありました。題名を見ただけで、学んだことや感じたことが分かるような付け方は、読み手を強く惹き付けますので、ぜひ大切にしてください。

考えたのは、書き出しの部分です。「本を選んだわけは」や「題名を見て考えたのは」など、感想文のはじめが、本を選んだ理由になっていて作品が多く見られましたが、それが感想に、どのように関係があるのか分かりにくいと感じました。題名と同じく、感想文の書き始めは、読み手を引っ張るような印象的な書き出しを心がけるとよいと思います。

【高学年】

高学年は、さすがに語彙や文末表現が豊かだと感じました。段落を意識しながら文章構成をし、自分の考えをどこにまとめたら効果的か考えられている作品が多かったと思います。自分と主人公を比べ、「自分だったら」と考えることで、主人公の考え方や生き方を捉えようと努力していました。また、同一作家の作品を読み比べるなど、読書体験が豊富であることも感じられました。

大切にしてほしいのは、そのお話が伝えたいことは何なのかをよく考えてほしいということです。主人公の姿に、自分の経験を無理に結び付けると却って逆効果になる場合もあります。本の主題からずれないように自身の生活を振り返りながら考えを深め、大げさな言葉でなくてよいので、自分の言葉で表現してほしいと思います。

人間の考え方や生き方を学び、広い視野をもつ豊かな人になるために、本は最高の先生です。これからも皆さんがよい本と出会えることを、願っています。

審査員 杉浦 美香子

たくさんのおうぼ
ご応募、ありがとう。
次も、お友だちをさそってトライしてね。



次回予告

2019年度冬休み良書推薦運動 第72回読書感想文コンクール募集要項

- 1 主 催 岩手県良書推進協議会
- 2 協 賛 岩手県学校生活協同組合
- 3 後 援 ・岩手県小学校長会 ・岩手県学校図書館協議会
・(一社)岩手県PTA連合会
- 4 課題図書 2019年「冬休み良書推薦運動」
学年・学団対象24冊・学年共通6冊 計30冊 (10月下旬案内開始予定)
※上記以外の図書、学団(低・中・高)ちがいの場合は、審査の対象となりません。
- 5 用紙・字数 ・1・2年生は400字詰め原稿用紙2枚以内
・3～6年生は400字詰め原稿用紙3枚以内
・1行目に題名、2行目に学校名・学年・氏名、3行目から本文
鉛筆は、B以上の濃さのもので書く。
・課題図書名は1枚目の枠外に縦書きで明記
- 6 応募作品 一人1点 (県下小学校児童)
応募作品は、オリジナルで自筆、未発表の物に限ります。
(他のコンクールとの二重応募は認めません)
・応募作品は、理由を問わず返却しません。(必要な場合はコピーをお取り下さい)
・応募作品の著作権、版権は主催者に帰属します。ただし、本人および在籍学校内での利用は妨げません。
・応募要項・課題図書名・前回までの上位入賞作品は学校生協ホームページで確認できます。
・応募された方の氏名・学校名・学年・感想文の題名・対象図書名および作品、表彰式の様子は、主催者および岩手県学校生活協同組合のホームページ、刊行物、取材報道等で公表することがあります。
- 7 応募締切 2020年1月24日(金) 当日消印有効
- 8 応募先 〒020-0691 岩手県滝沢市土沢220-5
岩手県学校生活協同組合 企画課 学用品内
「第72回読書感想文コンクール係」
TEL 019(687)2246 FAX 019(687)2240
- 9 賞 最優秀賞・岩手県小学校長会長賞・岩手県学校図書館協議会長賞・
岩手県PTA連合会長賞・優秀賞・入選・佳作・努力賞・学校賞・
学級賞

